

## 『軒もる月』をめぐる言語行為一心の「影」の世界への眼差し

笹 川 洋 子

## 一 はじめに

一葉は人妻が愛人からの手紙を読むという物語を二つ発表している。『軒もる月』と『裏紫』である。『軒もる月』は明治二十八年四月三日、五日の二回にわたって、『毎日新聞』に掲載された。一方、『裏紫（上）』は明治二十九年二月に『新文壇』第二巻、第二号に発表され、（中）の未定稿が残されているが、未完である。

『軒もる月』と『裏紫』には手紙を読む女が描かれる。『軒もる月』は職工の妻お袖、『裏紫』は裕福な西洋小間物屋のお内儀お律を中心に物語が進行する。そして、この二つの物語は、二人が善良な夫の愛に包まれながら、かつての愛人からの手紙、『軒もる月』では「桜町の殿」、『裏紫』では吉岡からの手紙を読み、心を乱すという共通の物語構造を持つ。しかし、恋文を読んだ後の二人の行動は対照的である。お袖は帯揚げに隠した殿の十二通の手紙を読み終え、高く笑う。そして、「微笑の面に手もふるえで」殿の手紙を次々に火にくべる。お律は、姉からの手紙と偽り、お律への疑いのみじんもない夫をだまし、巧みに外出許可を得て、吉岡と密会する。

一葉は『軒もる月』に先立って、未定稿『遠山鳥』や『ある人』を書いている。同じような筋立ての『軒もる月』と『裏紫』と比べると、これらの未定稿の方が、物語としてはより多様性が感じられる。にもかかわらず、一

葉は『遠山鳥』や『ある人』を手元に留め、同じ筋立てが繰り返される『軒もる月』と『裏紫』を続けて発表している。なぜなのだろうか。それは『軒もる月』では書き切れなかった何かが、一葉の内に残っていたからであろう。一葉は、『軒もる月』に続いて『にぎりえ』『十三夜』などの一連の作品で、「世の義理」に苦しむ女たちを描き、発表していく。しかし、単に理性や義理で生きる表面的な人間の描写にはあきたらず、より深遠で本質的、原始的な人間の思考、無意識の世界の知覚や直感を探ろうとした。そうした人間に備わった動物的で、本能的な感性として、一葉は恋愛という感情を見つめ、真っ向から描こうと試みたのではないだろうか。

本稿では、『軒もる月』の背後にある一葉の創作への思いに近づくために、まず『軒もる月』の解釈をめぐる論議を整理し、次に、人が心の深層に持つもう一つの世界「影」という視点から『軒もる月』を読む試みを行う。そして、最後に『軒もる月』で描ききれず、『裏紫』に託された主題について考えてみたい。

## 二 『軒もる月』のお袖の心情をめぐる論議

『軒もる月』は、誠実で勤勉な職工の夫への恩義と、愛人であった桜町の殿への愛との「二心」に引き裂かれるお袖が、自分の心試しにこれまで密封してきた十二通の恋文を思い切って読むという物語である。その心試しの結果、手紙を読み終えたお袖は三度高く笑い、手紙を火にくべる。物語は「からは灰にあとも止めず煙りは空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も遣らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し」という文で結ばれる。お袖が恋の煩惱から抜け出し、爽やかな境地に辿りついた情景が読み取れる。

しかし、関礼子は「女の発した笑い声は、そのようなもっともらしい読解のコードなど無意味であるかのように、高く深くテキスト空間に飜している。・・・(中略)・・・女の心の揺らぎとその克服という一義的な読みの方向を攪乱させ、軋みをもたらすものこそ、この笑いにほかならない(関礼子、前掲書、一一四頁)」と記している。

この謎めいた笑いを、藪植子（一九七九）は「自分の『魔』の「不気味さ」、山田有策（一九七九）は「虚無的とも言える高笑い」と判断を保留させる不可思議な笑いとして意味づけているが（関礼子、前掲書他参照）、近年では、この笑いをテキストの読みを反転させるものではなく、袖の心の変化を語る文脈と関連づけて解釈しようとする試みが多い。近年の読みとして、お袖の高笑いや微笑は豁然大悟のしるし、解脱悟道の表現（滝藤満義、二〇〇三）、真実を見据えてしまったお袖のむなしさ、微笑は恋の煩惱から逃れた嬉しさを表している（趙恵淑、二〇〇七）、殿への愛想尽かしの笑い（関礼子、前掲書）、へ心強い女子Vが誕生した瞬間（高田知波、前掲書）等があげられよう。いずれも熟考する女性としてのお袖を念頭に置き、お袖が現実を確認し、恋の悩みを消し去り、今の状況に對峙する姿勢を持ったと解釈している点は共通している。ただし、對峙する姿勢を持つお袖の心にあるものが、悟りか、虚しさか、強さかという点で論が分かれているわけである。

まず、滝藤満義（二〇〇三）は、お袖の心境を悟りと解釈し、お袖の笑いは悟道への文脈の中の出来事であり、お袖が着々と解脱の境地に急ぎ、遂に解脱悟道が達成されたと読むべきであると述べる。そうすると、月が照らす中、悟道への道を歩んだお袖の心は穏やかなものにならう。滝藤満義は、その一方で、『軒もる月』を性急な悟道小説と批判し、その後の一葉文学の人妻像は『軒もる月』に対するアンチテーゼとして成立していったと指摘する。

これに對し、趙恵淑（二〇〇七）は「殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ」というテキストに注目し、手紙の読みによって、恋の煩惱を消したお袖だが、同時に妻の倫理から逸脱した疑問を抱いてしまった、彼女の驚きがむなしさに変わり、そのむなしさが高笑いと表れたのではないかと記す。そして、「微笑」は恋から逃れた嬉しさだが、お袖は今後も「常の決心」通りに生きていくことはできず、悩みつづけるだろうとし、お袖を手紙によって「自分の決心に従って生きていけなくなった女性」と表現する。また、早矢仕智子（二〇〇二）も殿、

夫、子供も何者か、裏を返せば、自分の存在への疑問とつながると読み解いている。

さらに、お袖の強さをとりあげた論として、関口礼子(前掲書)はお袖が最後に至った心境を、桜町の殿のエゴイズムを読解した、袖の愛想尽かしの笑いであり、「同時代のふつうの女が抱くにはあまりにも逸脱した感情や思念を託することができる内奥の声」と解釈している。同様に、お袖の到達した境地について、戸松泉(一九九三も、自分を相対化し、存在としての、個としての自分をとらえる処までに達したと記す。関礼子は、「独白という登場人物のことはにも、地の文の語り手にも託せない感情や思念を、一葉は身体言語によってさりげなく表徴してみせた。後に一葉は、帰途中の偶然によるものとはいえ、上野の森に包まれた街路を歩く女や、『大空に物の思はれ』るように街中へとさまよい出てしまう女を描くことになるが、彼女たちの形象化の起点はこの笑いのうちに胚胎されていたといえるのである(一三〇頁)」と述べる。お袖は、倫理と原初的な感情の対立に引き裂かれる女性像の原型ということになる。また、高田知波は「氣や失はん心弱き女子ならば」という描写に、お袖の強靱な精神的エネルギーの噴出を見出し、高笑いを「密室の中における激烈な内面劇を経て一人のへ心強き女子」が誕生したその瞬間を鮮やかに浮かび上がらせる(高田知波、前掲書、一六一頁)」と述べている。

本稿も先行研究で指摘されている通り、お袖が自分の内面の葛藤を直視することで、恋の悩みを消し去ったとする見解にはば倣うものであるが、ここではお袖の「恐れ」という感情に注目したい。なぜなら、一葉は、夫への恩義に報えない自分と殿に惹かれる自分を恐れていたお袖が、心試しのため封書を読んだ後に、もはや恐れるものはないとお袖に強い決意を語らせる段落を挿入しているからである。この何ものかを強く恐れていたお袖が、「恐れるもの」がなくなつた爽快な境地に達したという文脈で読むと、お袖の高笑いも、これまで自分を縛ってきた恐れから開放された喜びの笑いと読むことができる。

次節からは、この「恐れ」という視点から、『軒もる月』を読み込む試みを行う。まず、お袖が恐れた心の闇に

について、先行研究の考察を踏まえ、考えてみたい。

### 三 手紙を読む女をめぐる言説と心の闇への眼差し

ユングは人間の深層的な人格を、表層的な人格（自我）に対して「影」と読んだ。影とはいわゆる、自分で認めたくない闇の側面、抑圧された願望などを含む。「～してはいけない」と思っていることも、無意識に追いやられ、「影」になる。しかし、ユングは「影」を無理やりに消し去るべき暗黒の闇という否定的な側面ではなく、「現実で生きられなかったもう一人の自分」として捉え、より創造的に生きる統合的な自我を作り上げるための不可欠な存在としている。そして、自我を統合するためには、自我を強化し、無意識の世界に対して開き、自我と影との厳しい対決をしなければならぬ。それは、影が自分が眼を背けたいと強く思う、深い闇にあるものであり、影と対峙することは、険しい断崖から飛び降りるような恐怖と勇気が必要とするからである。（河合隼雄、一九八九、参照）

今から百年前に生きた一葉の作品がこうした表層的な人格である自我と深層的な人格である闇との拮抗を扱っていることは興味深い。お袖は夫への恩義と桜町の殿への熱い思いという二人の男への想いに揺れている。両親の決めた婿である夫は、お袖の両親はじめ、家族を大切に、まじめな働き者である。お袖は夫の行為に強い恩義を感じている。一方、桜町の殿は別世界に住まう天上人のような存在であるが、妻帯者である。お袖が桜町の殿と暮らすには妾という道しかない。しかし、姦通罪<sup>(注)</sup>という身の破壊に結びつく危険性を鑑みても、お袖は殿に惹かれる心を抑えることができない。夫に対する有難き恩義を強引に自分自身に納得させ、殿に対する熱い想いは抑えてもお本能的に感情の底から沸きあがってくる。もし、殿の面影がなかったなら、心の鏡に映るものもないと袖は感じていた。義理という強引な倫理と本能的な恋心の拮抗にお袖はどう折り合いをつけたのだろうか。

高田知波（二〇〇二）は『軒もる月』を「貧しい家に婿を迎えた女」（お袖）と「高貴な家に入り婿として入っ

た男（桜町の殿）という読みから始める（高田知波、前掲書、参照）。続いて、高田は「よし匿名なりとも此眼に感じは変わるまじ」という表現について、殿の手紙が匿名で送られてきた（関礼子、前掲書他参照）のではなく、高田は例え匿名であったとしても殿の筆跡だとわかるという解釈をし、殿の手紙が実名で送られてきたと読む。さらに、この当時の姦通罪が人妻との関係だけを処罰の対象としていたことから、殿が袖の結婚を知らずに十二通の文を送りつけてきた可能性を示唆している。この殿の倫理観の解釈については、推測の域を出ないが、世の恩義に敏感で、倫理意識の強い、潔癖なお袖が殿の手紙を読む時にこの「姦通罪」を念頭に置いていたであろうことは想像に難くない。

袖は自らの心を夫への「恩」という倫理で縛り、桜町の殿への「愛」という感情を封印してきたが、「二タ心の不貞の女子」と自らの心を見つめ、遂にこれまで秘してきた恋文を読むことを決心する。「身の行ひは清くもあれ心の腐りの棄難くば同じ不貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拝し参らせん、殿も我心を見給へ、我が良人も御覽ぜよ。」これは結果次第では、自死か狂気に至るしかないような那智の大滝に打たれるような荒行であったと高田（前掲書）は記している。まさに表面的な「自我」が闇にある「影」に、ただならぬ決心を持って対峙する瞬間である。

その心試しの結果、それまでお袖は「櫻町の名を忘れぬ限り我れは二心の不貞の女子なり」と恩義の倫理にがんじがらめに縛られていたが、「いいざ雪降らば降れ風吹かば吹け・・・」と心を大きく開き、殿の手紙に見入る。お袖は殿の手紙を一気に読む。

この手紙を読むお袖の描写について、滝藤満義（二〇〇三）は一葉と同時代の女性、長谷川時雨の言葉をあげ、一葉の強引な筆の運びの強さを指摘している。「急に、お袖を立派な強い女にしたのは、そこに一葉女史が、屹とお袖を見守ってゐる感じがする。反れようとするお袖の心を、自分の方に撻ちむけて、鍛え直させてゐる」。

趙恵淑（二〇〇七）は殿の筆のあやのない手紙について、それは殿が文学的素養のないお袖に向けて、わかりやすく簡便な表現を用いて書いたものであり、そして、袖は心に浮かべる殿の容貌と手紙から響いてくる殿の恐ろしい声の乖離を感じ、手紙を読むことで恋の煩悩を沈めてしまったのではないかと解釈する。しかし、一葉作品の軌跡から見ると、一葉は女性主人公を教養のない、考えの浅い人物として描いていない。お力や美登利という社会の底辺である遊離に生きる女性にも、一葉自身を投影し、自己を厳しく見つめ、また状況を鋭敏に観察する人物として描いている。そこが、一葉文学の限界であり、魅力であると言えるであろう。また、お袖の感じた殿の表現は、それが文学的ではない直接表現への落胆ではなく、袖の状況を考えず、一方的な恋情の暴露に終わる殿の利己的な手紙に、殿の限界を感じたのではないかと関礼子は指摘する。関礼子は桜町の殿の一方的な手紙は、袖が「恋の対象」としての粗読者から、手紙というメッセージの精読者になることで、「自らの地位の変更是全く考慮していない富裕な妻帯者のエゴイズム」を正しく読解する自立的な読者になったと読み取る。一葉は書く。

封じ目ときて取出せば一尋あまりの筆のあやもなく、有難き事の數々、辱なき事の山々、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縦横に散らして、文字はやがて耳の側に恐ろしき聲もて叩くぞかし、一通は手もとふるへて巻収めぬ、二通も同じく三通四通五六通よりはすこし顔の色かはりて見えしが、八、九、十通、十二通、開きては読みよみては開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。

一通、二通目の殿の手紙は、「血の涙」「胸の炎」が生々しくお袖の耳に響き、手を震わせるが、三通、四通、五、六通目の手紙は、袖の顔の色を少し変わらせる程度である。八、九、十通、十二通目を読む袖の描写からは、もはや殿の手紙が袖の心を動かすものではなくなったことがわかる。

殿が自分が人妻となっていることを知るにせよ、知らぬにせよ、袖は姦通罪という世の強い倫理を心に置いて、手紙を読み進めたであろう。殿の手紙は、お袖の返信がなかったせいもあるが、一方的な愛情表現が多い。関口が指摘するように、妻帯者である殿は、失うものがないが、お袖にとっては殿の誘いにのることはあまりにも犠牲が多い。一葉の筆は、殿の手紙にそうしたお袖への配慮があったことを伝えていない。人は何通もの手紙を読む状況で、その手紙への関心が薄れた時に、目を飛ばしながら、手紙を読むのではないか。そして、無関心とともに、袖の心の変化を表しているのが、恐ろしいという言葉である。

袖の恐れの変化は『軒もる月』全体を包む主題になっていると思われるが、それを明らかにするためには、さらに、袖が自身の「影」の世界に対してどのように恐れを感じ、「影」の世界との激烈な対峙を経て、どのように恐れという感情を消し去ったか、その心の変化の過程を物語の流れに添って見ていく必要がある。

#### 四 『軒もる月』に描かれた「影」の世界との対峙

ここでは、『軒もる月』を、自分自身の心の闇である、「影」の世界にある、殿や夫への恐れや不安に悩んでいた袖が、「影」の世界を直視することによって、世の倫理に適った「常の世界」と罪につながる「影」の世界との不調和による苦しみを消し去り、現実を強い気持ちで受け止めようと決意する物語として読んでいきたいと思う。

物語は袖が、寒い夜に残業をしている夫を案じる場面から始まる。夫はどんなにか寒く辛い思いをしているだろう。早く帰っていらっしやるように、と袖は思う。ここでは袖は自分が「常の世界」とする世界に思いをはせる。

しかし、袖はふと障子戸を開け、軒ばにのぼった月を見る。月の白い光が霜を伴い、真冬の寒さは肌に針を刺すようである。そして、月が闇を照らすように、袖の思いは自分の心の影に差し込む。袖は、桜町の殿のことと封を切らない手紙を思う。封を切れば、常の決心が消えそうで不安だ、最愛の殿も自分を憎んでいるだろうと袖はだん



だと普段は封印していた心の影の世界に近づく。

貧しい我家しか生きる世界はないと想っていた袖にとって、桜町の屋敷での生活は天上に遊ぶがごとくであった。しかし、世間の目から見ると、殿の御寵愛を受ける身は犬猫にも等しいものであろう。しかし、秘してはきたが、夫と決まった職工を殿と比べ、袖は天女が羽衣を失ったような心地がしたのだ。袖の「影」の世界には複雑な、苦い想いが渦巻いている。

しかし、と袖は殿との関係には将来性がないと分析する。野の粗末な花のような自分は殿の書院の花瓶に指すには似つかわしくない。この縁を断ったとしても、親に苦勞をかけ、同じ貧しい社会を彷徨うことになる。例え、天上での生活がかなったとしても、世間の目に汚らわしく映り、何よりも殿が世間から誇られよう。奥方の目は私を憎み、殿を嘲っていたではないか。袖は、この二つの段落で、世間の目を気にかける表現を使う。袖の恐れの中に「世間の目」が含まれていることがわかる。

針をさすような寒さの中にたたずみ、ものを思った袖は、ここで世間の目に恥じない「常の世界」に立ち戻り、戸を閉める。その音に子供が目を覚まして泣き、乳をせがむ。袖は子の可愛さに心引かれる。

しかし、袖の思いは再び、自分の封印している、もう一つの不安の影の世界に戻る。袖は夫のことを思い、自分が夫を卑しむと感じたのではないかと恐れる。夫は出世して、樂をさせる、自分を不甲斐ないと想わないでくれ、このままではおくものか、と口癖のように言うが、それを袖は恐ろしいと思う。自分の大恩ある夫を卑しむ心が顔に出ているのではないか。両親を心から介抱してくれた夫。生涯大事にしなければいけない人なのに、自分では気づかず、不足の素振りをしたのだろうか、果敢なき樓閣を夢想する最中に、自分の名を呼び立てられ、夫に用事を言いつけられた時、恨みが態度に出てしまったのだろうか。そうしたんでもない罪は私の心持のせいだ。しかし、と袖は自分の心の奥深くにある思いを見つめる。桜町の殿の面影がなければ、心の鏡に映るものもないだろうに。

殿さえいなかったなら、私の心は静かなのに。いやこんなことを思つてはいけない。袖は「常の世界」に立ち戻ろうとする。

母の心が彼方にあるとも知らずに、乳房に顔をよせたまま眠る子の可愛さを袖は見つめる。この子がいる身なのに、二つの心を持って済むものか。夫を不足に想つて済むものか。先ほど自分で考えたように、桜町の世界に戻つても空しいだけだ。はかない、はかない。桜町の名を忘れない限り私は二心の不貞の女子だ。袖は、ここで「常の世界」の倫理を自分に言い聞かせる。袖の心は、桜町の殿を忘れようという方向に大きく動き出す。

子を寢床に移し、袖はやおら立ち上がり、葛簾の底に秘めた一二通の文を取り出す。「拝さば此胸寸断になりて常の決心の消えうせん覺束なさ」と長い間、封印を解くことを避けてきた殿の手紙を読もうと決心したのだ。殿の手紙の封印を解かなかったのは、心が強いと想っていたけれど、卑怯な振る舞いであつた。身は清くても、心が不貞をしている身であつた。心試しをしよう。殿、夫、神、仏、我が心が清めるか濁れるかご覧ぜよ。

そして、袖は手紙を読む。一、二通目の手紙には、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縦横に散らしてあつた。殿の恐ろしい声が聞こえるようで、手が震え、収めることができなかった。三通、四通、五、六通目の手紙を読んだ袖の顔色が少し変わる。八、九、十通、十二通目になると、開いて読んでいるが、文字が目に入らぬか、入つても読まないようであつた。

一葉の筆は、再び手紙を読む袖の内面の荒行を表現する。貧しい身なりだが、女は美しい。貧しい生活の中にも、汚れはしないと思う身の何処かに悪魔が潜み、道理に反したことを思わせたのであろう。雪よ降れ、風よ吹け、心の海に波が立ち、釣り船は揺れ乱れるか、晴れ渡った空に鶇が鳴く、春ののどかな心境になるか、心試しをしている今は、殿の面影は抑えず、あくまで胸に浮かべよう、夫の幼さもごまかすのはやめよう、煩惱は自然に消えるものであつて、殊更強いて消すものではない。血も沸きたければわけ、炎も燃えよ、と微笑を浮かべ読んでい

く。恋人の涙の文字は大滝のごとく女を打つ。心弱い女子なら氣を失ったであろう。袖は自分の内面の影の世界を直視する。

夫や殿、そして自分の覚束ない思いを封印してきた「影」の世界を恐れていた袖だが、手紙を読み進める袖にもはや恐れ表現はない。ここには自分の恐れていた「影」の世界に真つ向から対峙しようとする強い覚悟が感じられる。袖は自分がもはや恐れない女であることを語る。

児の寝姿が見える、膝の上の文からは殿の御声が聞こえる。そして、外には夫が戻ってくるであろう。今夫が戻ったとしても、この文を隠しはしない。殿がここに現れ、死んでしまいたいと言っても、私の心は動かない。

女はしばらくうつとりとして天井を見上げていた。灯火の淋しくぼんやりとした胸を照らす。音の耐えた中、犬の遠吠えが聞こえる。隙間からもる風の音もしない。すさまじい寒さがおそってくる。今まで、不安や恐れに苛まれ、生きてきた袖が、恐れのない心を持った瞬間である。高田知波の言うへ心強い女子の誕生であろう。

女は夢路をたどっているようであったが、何かその虚ろな胸に響いたよう、女はあたりを見廻して高く笑う。自分の影を顧みて高く笑う。殿、我良人、我子、これや何者と高く笑う。袖に高い笑いを起こさせたものは何だったのだろうか。

辺りにあるものは、前の段落に書かれた通り、膝の上の殿の熱き思いに満ちた手紙、可愛い子の寝姿、外から帰り来る恩義ある大切な夫、そして世間の目であろう。影は自分を恐れさせ、悩ませた、文字通り袖の内の「影」の世界と言えよう。そして、一葉は袖に表現させる。殿の愛、夫への恩義、子供の可愛さ、そして世間が私に恐れさせたものは何であったのだろうか。そして袖は高く笑う。

もう袖は恐れるものがなくなったのである。女は目の前に散らかした文をとりあげ、「さあ殿、今こそお別れいたしましょう」と涙もみせず、強い決心をしたようでもなく、微笑みながら手も震えず、手紙をずたずたに破き、

炭火にくべる。文は跡形もなく灰になり、煙は空に消える。嬉しい、私には執着も残らなかったと眺めれば、月の光が軒からもれ、風の音が清らかであった、と一葉は結ぶ。

袖はその表情に激しいものを見せないが、手紙を引き裂くという行為は、強い力と意志を必要とする行為である。桜町の殿の手紙は巻紙であつたろう。そうした書簡を一気に引き裂くには、心に迷いや弱気があつてはならない。そして、一葉は一通ならまだしも、十二通もの文を袖に引き裂かせる。袖の内面に何ものか、断固とした強い意志が満ち、すさまじいまでの強い力になって十二通もの手紙を引き裂かせることをこの描写から読み取ることができる。それは、「悟り」や「虚しさ」、「殿への愛想尽かし」という言葉ではとらえられないほど激しい力である。そして、袖がその存在意義をかけて闘い、彷徨つたものは、自分の深層にある原初的な世界、殿への愛情だけではない、恩義に縛られた夫への思い、そして本能から沸きあがつて来る我が子への可愛さをも含む、「影」の世界だったのである。そして、袖は封印してきた手紙とともに、自ら封印してきた「影」の思いも消し去つたのである。

## 五 『裏紫』に託されたもの

一葉は表面的な人間の心理だけではなく、深層にある影の心理にも眼差しを向け、社会的な人格としての静める魂としての人間と、本能的な人格としての荒ぶる魂としての人間の拮抗を描いた。お袖はこの劇的な内面の戦いに立ち向かい、より創造的、統合的な自我を作り上げたと解釈することができよう。

しかし、一葉はそうした近代的な解釈に満足しなかったのではないか。『軒もる月』に続き、心の闇に放り出されるお関、自己を引き裂き、死に向かうお力、そして、誠実な夫を裏切り、愛人のもとに赴くお律、安定した生活を捨て、破滅的な人生を選ぶ美尾、と一葉は「常の世界」に安住せず、あえて荒涼とした「影」の世界を彷徨う女

性を次々と描いていく。

近代に生きる私たちは、「自我の統合」「調和的な人格」という概念装置を持ち、それをやすやすと口にすることが、時に主体を引き裂くほどに相反する、理性としての自我と本能的な影の自我を統合することは可能なのだろうか。社会的人間としての私たちは、表面的な自我と本能的な感情を激しく戦わせることを避け、自分を真っ向から見つめ得ない弱さを曖昧にし、自己の深淵を覗くことをせず、調和や統合という言葉で、妥協やごまかしを見事に言い換えているのではないか。一葉の自己を見つめる鋭く強い眼は、明治という時代から近代に生きる私たちに生の意味を問いただしているように思える。『軒もる月』で「影」の世界と戦い、「もう一人の自分」を葬り去った女は、『裏紫』では「影」の世界の「もう一人の自分」に導かれていく。

さらに、一葉の視野がとらえていたものは、社会や制度の不合理という問題だったと言われている。一葉は、ありきたりの生の描写には満足せず、この後、『裏紫』『われから』と、姦通罪に真っ向から立ち向かう、すさまじいエネルギーに満ちた人妻の愛を表現していくことになる。

なお、一葉は『軒もる月』の中で、興味深い表現装置を用いている。つまり、無人称、袖、女という人称の使い分けである。無人称が使われる時は、主に袖の心的空間、心的行為が描かれ、女という人称は袖の身体的空間、言い換えれば袖の身体行為を表現している。そして、物語の前半では無人称が多く、後半は女という人称が多く使われる。つまり、物語の視点が心的行為の描写から、身体的行為の描写に推移していくのである。

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに 「歸らせ給はゞ興なくや思さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを、時は今何時にか、・・・・

女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧みて高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ、目の前に散亂れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまゐらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面の手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に爲し了りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ・・・

さらに、行為の激しさという点から見えていくと、袖の心的行為は不安や悩みが激しく渦巻き、心的な荒行を頂点として、静まっていく。反対に、身体行為は、月をみつめ、子をあやすという静的な行為から、十二通もの手紙を引き裂き、火にくべ、高く笑うという動的な激しい行為に移っていく。つまり、心的行為と身体行為は交差するうちに、動から静へ、そして静から動へと変化していくのである。ただし、心的行為と身体行為の描写が交わる箇所がある。それは、袖が殿の手紙を読む場面と手紙を読み終わって決意を語る場面である。一葉は、袖が手紙を読む場面では、まず袖の身体行為を描き、続いて袖の内面で起こる心的行為の描写を添えている。

・・・一通は手もとふるへて巻収めぬ、二通も同じく三通四通五六通よりはすこし顔の色かはりて見えしが、八、九、十通、十二通、開きては読みよみては開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。・・・

・・・櫻町が殿の面影も今は飽くまで胸に浮べん、我が良人が所為のをさなきにも強て隠さじ、百八煩惱自から消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け灸も燃えばもえよとて、微笑を含みて読みもてゆく、

・・・

さらに、手紙を読みおわった袖が恐れるものはないと強く決意する場面では、まず袖の内面の心的空間の描写、次に外からの視点がとらえた袖の身体行為と、表現は手紙を読む場面とは交差的に表現される。

・・・たとへば我が良人今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隠さん。殿、今もし此處におはしまして、例の辱けなき御詞の数々、さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さては勿躰なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸の騒がんものか、動くは逢見たき慾よりなり、騒ぐは下に戀しければなり。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、孤燈の火かけ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてり返すやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すごく、隙間もる風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、来し方行く末おもひに忘れて夢路をたどるやうなりしが、

こうした表現装置の工夫により、手紙を読む場面は物語のクライマックスとして読者の印象に鮮やかに残る。しかし、一葉は『裏紫』では、心的行為より、より多くの身体行為へと表現の焦点をあて、お律の物語を描こうとしている。『裏紫』は『軒もる月』より具体的な身体行為の描写が多く、そのため物語として強いメッセージ性を読者に想起させる。一葉の「考える女」から「行為する女」の物語を書こうという姿勢が行間から伝わってくる。

より正直に自分の「影」の世界の声を聞き、世間の制度にさえとらわれず、自ら考え行動していく女、それが『軒もる月』では描ききれず、『裏紫』に託された一葉の想いだったのではないだろうか。

## 六 おわりに

本稿では、お袖の桜町の殿に向ける愛情との戦いというだけにとどまらず、お袖が日ごろ封じ込めている夫への思い、また本能からわきあがってくる感情をも含めた「影」の世界との戦いという視点から『軒もる月』を読み込んできた。一葉が、ユングの自己の「影」の世界との闘争という概念と同じ問題意識を持っていたのではないかと思いに至る時、一葉の鋭い知性、そして感性に驚嘆の念を抱かざるを得ない。しかし、それでもなおこの作品を十分に考察できなかったという思いが残る。そこに一葉作品の精神性の深さを感じる。この若い女性性明治という女性への激しい差別が日常的であった時代に、近代をも超えた冷徹な意識で人間の深層に迫っていく。その目は、人間の弱さや悲しさ、崇高さ、世の無常、社会の不合理、そして懸命に生きる女性に向けられている。さらに、一葉の創作に込めた強い意志に迫るには、さらにいくつかの物語を架橋していく視点が必要になろう。

また、お袖は恋文を帯揚げに包み隠し、お律は恋文を帯の間に収める。お袖は帯揚げに文を隠しはするが、文を包み込んだまま身につけることはしない。お袖にとって、その文は遠い位置に置かれる。しかし、お律が帯の間に入れた文は身に添わせ、そして誰の手にも触れられない場所にある。それはお律の肌に触れんばかりの近い位置である。また、固く封印された手紙は、固く閉ざされたお袖の心の深層と重なる。さらに月の光は、冒頭では障子戸を開けたお袖の体全体を鋭い寒気とともに包む。袖は戸を引き立て、月の光は部屋に入っていない。しかし、最後の場面では、「月よりもくる軒ば」とあるように障子戸を閉めたてても、なお部屋に月の光がもれてくる表現が置かれる。月の光は桜町の殿への思い、障子戸をたてた部屋は袖の心と呼応し、物語には書かれなかった、袖の思いの行方を暗示しているようにも思える。一葉はこのような見事なメタファーを作品のあちこちに散りばめていると言われるが、そうしたメタファー、特に古典の物語と一葉作品との関連から、『軒もる月』を分析する研究も望ま



れる。

さらに、一葉の著した日記や手紙と『軒もる月』を読み比べ、作者の生活世界から作品を読んでいく試みも行わなければならないであろう。ここにあげた、いくつかの点を今後の課題としたい。

△注Ⅴ 姦通罪は明治十三年。明治四〇年の刑法で定められ、いずれも結婚した女性とその相手のみを処罰の対象としている。姦通罪の廃止は一九四七年十月の刑法改正を待たなければならない。一九四七年に施行された日本国憲法十四条に男女平等が定められたが、姦通罪は同条に違反するとされ、廃止された。

旧刑法（明治十三年太政官布告第三六号）第三五三条

有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ効ナシ

（夫のある夫人で姦通した者は六月以上二年以下の重禁錮に処す。その夫人と相姦した者も同じ刑に処す。本項の罪はその夫人の夫の告訴を待ってこれを訴えることとする。ただし夫が先に姦通を容認した場合は告訴の効力はない）なお、旧民法第七六八条により、姦通によって離婚または刑の宣告を受けた者は相姦者と婚姻することはできなかった。

刑法（明治四〇年法律第四五号）第一八三条

有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス其相姦シタル者亦同シ

前項ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス但本夫姦通ヲ縱容シタルトキハ告訴ノ効ナシ

（夫のある夫人が姦通したときは二年以下の懲役に処す。その夫人と相姦した者も同じ刑に処す。前項の罪はその夫人の夫の告訴を待ってこれを訴えることとする。ただし夫が姦通を容認したときは告訴の効力はない）

△参考文献▽

河合隼雄（一九八九）『影の現象学』思索社

菅聡子（二〇〇一）校注『軒もる月』△新日本古典文学大系 明治篇24▽『樋口一葉集』岩波書店

関礼子（一九九七）『語る女たちの時代——葉と明治女性表現』新曜社

高田知波（二〇〇二）『某の上人がためしにも同じく——『軒もる月』を読む』『論集樋口一葉Ⅲ』おうふう

滝藤満義（二〇〇三）『軒もる月——悟道を急ぐ女』『国文学 解釈と鑑賞』

趙恵淑（二〇〇七）『樋口一葉作品研究』専修大学出版

戸松泉（一九九二）『軒もる月』の生成——小説家一葉の誕生』『相模女子大学紀要』

早矢仕智子（二〇〇二）『軒もる月』における一葉の語りの方法』『宮城学院大学大学院人文学会誌』

村上一博（二〇〇三）『日本近代婚姻法史論』法律文化社

蔵禎子（一九七九）『一葉文学の成立と展開——魔を中心に』『藤女子国文学雑誌』

山田有策（一九七九）『軒もる月』鑑賞』『全集樋口一葉②』小学館

△資料▽

『軒もる月』『裏紫』

『樋口一葉全集』第一巻、一九七四年、筑摩書房

△新日本古典文学大系 明治篇24▽『樋口一葉集』二〇〇一年、岩波書店

未定稿他

『樋口一葉全集』第二巻、一九七四年、筑摩書房